

# 林業試験場道南支場から「発見」された1920～70年代の 植物標本について（上）—標本の概要と特徴—

新田紀敏・徳田佐和子

## 1 はじめに

2023年、道総研林業試験場道南支場（北海道函館市桔梗町、以降「支場」）内で倉庫として使用していた古い住宅（写真-1左）を整理していたところ、大量の植物標本が見つかりました（以降「支場標本」）。標本は2つに分けられ、一方は引き出し式キャビネット内に（写真-1右）、もう一方は床に置かれていました。簡単に確認したところではデータラベルが貼られ、1920年代の日付とかつて北海道庁拓殖部にあった湯ノ川森林事務所の名称が確認できたことから貴重なものと考え、当面の保存処置をするとともに必要な整理作業を行って今後の扱い方を検討することとしました。

ここでは、見つかったときの標本の状態と整理の過程、支場標本の内容と特徴を報告します。



写真-1 保管されていた建物（左）とキャビネット（右）  
引き出しの中に標本が納められていた。

## 2 支場標本の概要

標本はジーナスカバー（通常標本庫で用いられている分類を表示した表紙）なしにキャビネットの引き出しに収納されるか、段ボール箱に入れられて（一部は標本が裸のまま積み上げられて）床の上にありました。置かれていた部屋に空調はありませんでした。各標本は大きさや形式が様々な台紙にほとんどが紙テープで貼られ、多くは下部にラベルが貼付されていました。ラベルには採集データが主にインクで記入され、標本を管理していたと思われる「函館林務署」等のスタンプが押されたものもありました。採集データはほぼ完備されており、学名も記入され、複数の採集者をラテン語の et で結んでいることなどから、標本を整理した人物は大学等で標本作成を学んだことがうかがわれました。

標本は合計1,939点ありました（写真-2）。キャビネット内のは草本類で採集年代、採集地、採集者とも多様でした。床に置かれたものはほとんどが木本類で採集時期は1970年代が多数でした。保存状態は保管の仕方によって大きく異なりました。キャビネットに納められた標本の保存状態は概ね良好

で、カビや虫食いは僅かでした。一方で、床に置かれた標本は傷みが激しく、特に裸のまま置かれていたものは虫、カビ、腐朽の被害が進んでおり、多くは残念ながら学術標本としての価値が低下していました。これは当初段ボール箱に入れられていたものの、湿気等で箱が崩壊し、その後再乾燥や防虫などの保存措置が取られなかったためです。段ボール箱に入っていた標本は多少被害が少なかったものの、密封性が低いため虫が入ったことと床からの湿気が伝わって下部が傷んでいたため、最終的には廃棄せざるを得なかったものが多くなりました。傷みが激しく廃棄したもの(写真-3)は441点になりました。

標本とともに手書きの冊子が保管されており、「大津海岸野生植物目録」、「昭和12年9月十勝国中川郡豊頃村南縁地帯官林内の植物について一予報一」、「植物標本目録(1961.8.1池田林務署)」（以降「目録」）と「植物標本抽出台帳(道立林業試験場道南支場)」（以降「台帳」）の4点でした。目録は池田林務署の増田憲二郎技師(当時)がこの時までに整理した標本の一覧で、台帳は支場標本全体の種と点数をまとめたものと考えられましたが、そのほかは著者や標本との関係はわかりませんでした。

### 3 整理作業の内容

キャビネット内の標本は乾燥しており、保存状態は悪くなかったので緊急処置はしませんでした。床に置かれた標本は虫害がひどく湿気を帯びていたため、保存処置は緊急を要すると判断し、保存価値がない程度に傷んでいるものを除いて応急的に1点ずつ新聞紙に挟み、送風乾燥機による水分の除去(40℃, 7日間)を行いました。その後すべての標本の冷凍駆虫(-40℃, 7日間)を行った後、必要に応じてクリーニング、補修、ラベルデータの補足を行い、OPP製保存袋へ入れました。保存処置が終わった標本は仮同定しながら適宜分類訂正などのアノテーションカードを添付し、ラベル内容を表計算ソフトに入力して目録を作成しました。中にはラベルのないものもありましたが、判別できるデータが台紙に記入されていたので、それを基にラベルを作成しました。仮同定は、改訂新版日本の野生植物1~5(大橋広好ほか編, 2015~17)を主とし、増補新版北海道樹木図鑑(佐藤孝夫, 2017)、北海道の草花(梅沢俊, 2018)を参照しま



写真-2 確認中の支場標本

これはキャビネット内にあったもので、これで約半数。



写真-3 傷んだ標本の例

粒状に見えるのは虫糞で、虫害により植物の形態がわからなくなってしまうと保存する価値はない。

した。また必要に応じて、北海道大学総合博物館標本庫、林業試験場標本庫の標本との照合を行いました。ラベルの採集者表記は漢字姓名のほかに姓のみ、イニシャルなど複数形式の略称となっていることも多かったので、北海道（庁）職員名簿を参照して同一人物であることの確認をしました。

その後は分類順に並べ替えて段ボール箱に納め、道総研林業試験場の標本庫で保管しています。

## 4 支場標本の内容

### (1) ラベルの詳細

ラベルは印刷された紙片にインクでデータが記入され、ほとんどは台紙の下側に貼付されていました。市販品である可能性もありますが、長期の保存を前提に用意したものでしょう。ラベルは1段目にNo.と科名（和名）、2段目に学名、3段目に和名が記入されていました。4段目に採集地、5段目に日付の欄がありましたが、5または6段目に採集者の欄があるものとなないものがあり、ないものは欄外に採集者が書かれていました。科名は平仮名または漢字で書かれ、和名は1930年までは平仮名、その後は片仮名で記入されていました（写真-4）。日付は元号が印刷されているものの以外は西暦でした。月まで、日は記入されていないものも多数ありました。

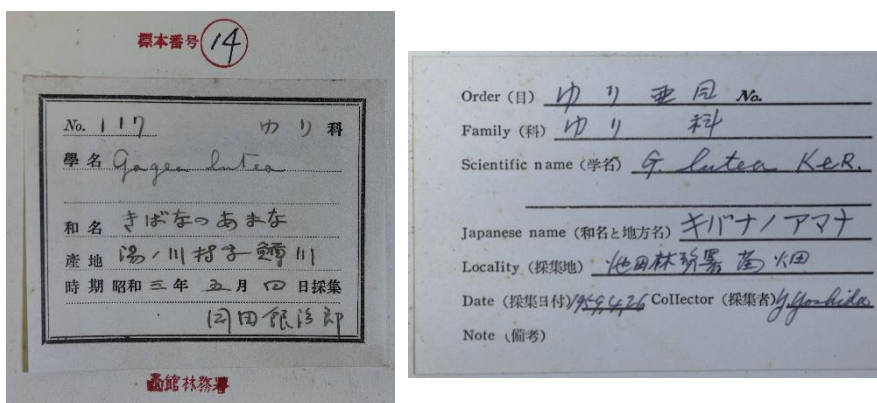


写真-4 ラベルの例

1920年代の湯ノ川村（左）と1950年代の池田林務署忠類苗畑（右）。時代によって形式は異なるが必要なデータはほぼ完備されていた。

多くはラベルの周辺に

「標本番号」というスタンプに続けて丸囲の数字がありましたが（写真-4左）、台帳によると1970年代に納められた箱の番号でした。さらに森林事務所や林務署のスタンプが押されたものも多数ありました。十勝地方の標本ラベルには1段目に目の欄があるものがありました。

### (2) 採集地の特徴

支場標本の採集地は全体では、熊本県阿蘇、岩手県などの道外、道内ではむかわ町穂別、円山公園（データにはないが札幌市か）などもありますが、つぎの3つの時期・地域に集中していました。

1920年代道南地域の採集範囲は、湯ノ川森林事務所の所在地である湯ノ川村（現・函館市）が多く、西は函館市から東は尻岸内村（現・函館市古武井町）に及んでいます。北は駒ヶ岳までです。ほぼ森林事務所の管轄地域内ということでしょう。

1950年代の十勝地域は林務署所在地の池田・浦幌両町内と苗畑があった忠類村がまとまってあり、豊頃町、本別町があります。こちらも所在地・管轄地域とその周辺でしょう。

1970年代の道南地域は支場のある函館市桔梗町周辺が多く、採集範囲は西は奥尻町、東は旧榎法華村、北は七飯町大沼公園に及びます。

### (3) 分類群構成

同定については精査していませんが、現在のように図鑑・図譜類が完備されていない中でもかなりの精度があるようです。分類は北海道植物銘鑑（菅原繁蔵，1958）に拠ったと目録に書かれています。

現在の分類とはかなり違うものもあるため概数になりますが、台帳から科ごとの種数が全体に占める構成比を計算しました。シダ類は5.3%を占め道内の構成比に近い値でした。種子植物の科ごとに見るとキク科が9.4%と圧倒的に多く市街地付近の開けた場所や苗畑内での採集が多いことを反映していると

思われます。続いてバラ科が6.9%と多くありましたがサクラ類など栽培種が含まれていることを反映しているようです。イネ科は4.8%と道内の種構成比に比べて少なくなっています。カヤツリグサ科が2.4%とかなり少ないことと合わせて考えると同定困難な分類群の採集を控えたことが考えられます。続いてキンポウゲ科(4.4%)、ツツジ科(3.9%)が多く、これらは道内の種構成よりやや多い程度でした。林業関係者の採集ですが、木本類に偏っていることもなく、年代、地域いずれをみてもそれぞれ植物相をある程度反映しているように思われます。

特記すべき植物もありました。1930年採集となっているので、ツリガネニンジン(シラゲシャジン)の種内分類がまだ定まっていなかった時期の品種シラゲシャジンです(写真-5)。この標本には鉛筆でツリガネニンジンと書いた和名を二重線で消して、det by T. Makinoとしています。学名は1908年に牧野富太郎博士が採用していた品種名を引用し *Adenophora verticillata* var. *typica* と書かれています。おそらく、分類に迷った時に当時の議論を知って重複標本を牧野博士へ送り、同定を仰いだのでしょう。そのほかに、クマガイソウ(湯ノ川村1928 戸田東、厚沢部町1976 増田憲二郎)など、今では希少性から採集がはばかれる植物が含まれていました。

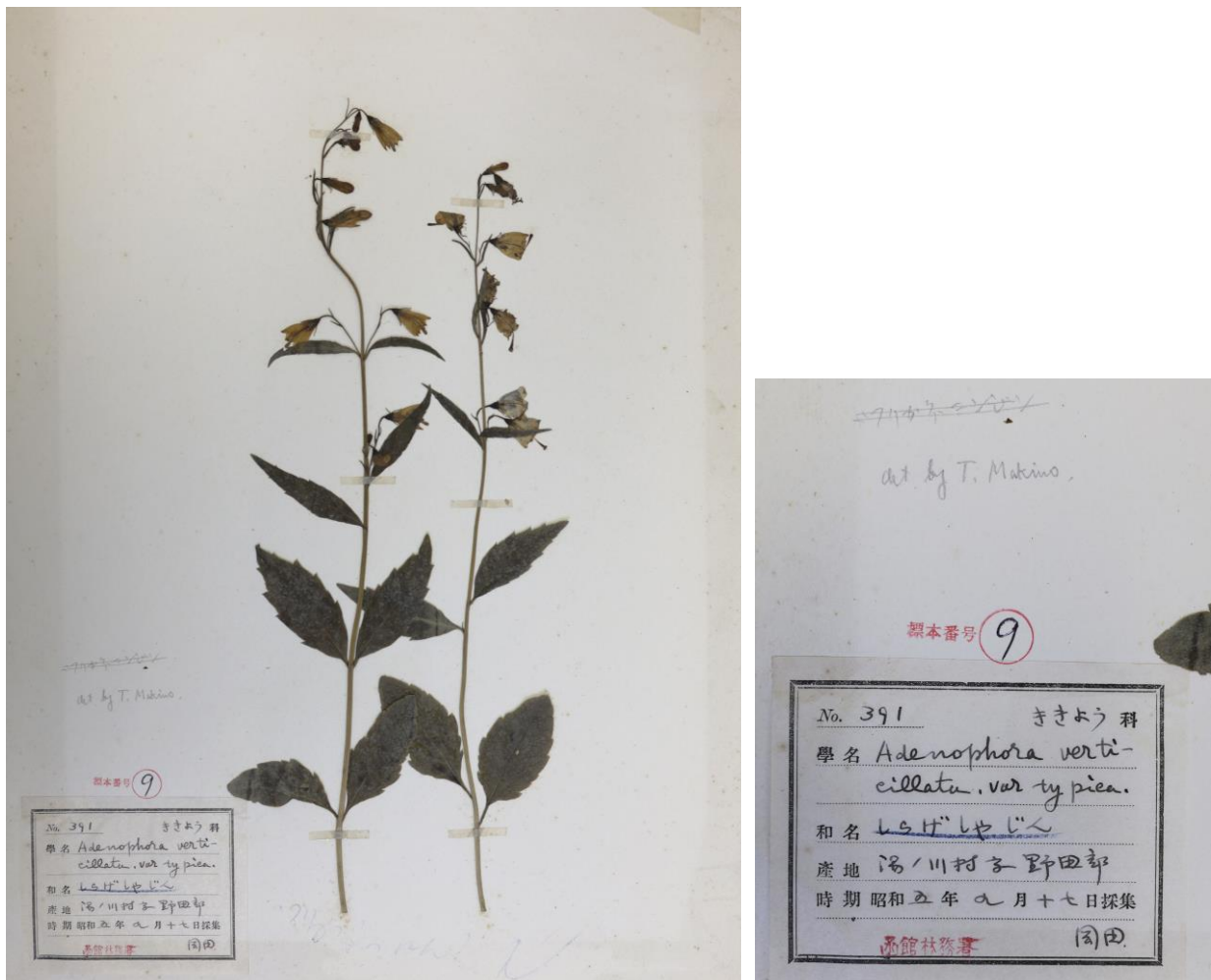


写真-5 T. Makinoの書き込みがあるシラゲシャジン(右はラベル部の拡大)

det by T. Makino は牧野富太郎博士がこの標本または重複標本を見て同定したことを示す。

次報では支場標本の採集から再整理までの100年におよぶ経緯、すなわちどのようにして林業試験場発足の標本までもが支場に保管されていたのかについてと今後の活用法について報告します。

(保護種苗部保護グループ・道南支場)

### 参考文献

- 大橋広好, 門田裕一, 邑田仁, 米倉浩司, 木原浩 (編) (2015) 改訂新版日本の野生植物 1. 平凡社, 東京
- 大橋広好, 門田裕一, 邑田仁, 米倉浩司, 木原浩 (編) (2016) 改訂新版日本の野生植物 2. 平凡社, 東京
- 大橋広好, 門田裕一, 邑田仁, 米倉浩司, 木原浩 (編) (2016) 改訂新版日本の野生植物 3. 平凡社, 東京
- 大橋広好, 門田裕一, 邑田仁, 米倉浩司, 木原浩 (編) (2017) 改訂新版日本の野生植物 4. 平凡社, 東京
- 大橋広好, 門田裕一, 邑田仁, 米倉浩司, 木原浩 (編) (2017) 改訂新版日本の野生植物 5. 平凡社, 東京
- 佐藤孝夫 (2017) 増補新版北海道樹木図鑑. 亜璃西社, 札幌
- 梅沢俊 (2018) 北海道の草花. 北海道新聞社, 札幌